

## 「チームとしての学校」について

### －「教職実践演習」を受けて<sup>(注1)</sup>－

安部隼（人文学部日本伝統文化学科4年）

現在、学校の教職員は、複雑化・多様化する問題に時間と労力を取られ、本来の仕事である授業や生徒指導などの教育に専念できていない。「チームとしての学校」はそのような状況を変えるために掲げられているためのものである。専門的な人材を学校に配置し、学校の運営に関わらせたり、学校組織と地域社会の連携体制を整えたりすることによって問題を解決し、授業や生徒指導に専念できるようにすることが目指されている。そのためにも、学校と教員は専門的な人材であるスクールカウンセラー（SC）やスクールソーシャルワーカー（SSW）のほか、地域の児童相談所（児相）やPTAといった組織と連携した体制を作っていく必要がある。しかし、授業内で聞いた話ではうまく連携が取れているという話は少なかった。

中学校の教員の話によれば、問題を抱えた生徒は専門的な人材に任せて、ただ報告を受けることが多く、そこには連携はなく、教員が専門的な人材に丸投げしてしまっているということだった。これは「チームとしての学校」が目指している、それぞれが連携していくという考え方とは違うものである。人材の専門性という部分だけが受け入れられているため、このようになってしまっているのだと考えられる。

また、連携しようにも連携の体制が整っていないということもある。児相から生徒が保護されたと連絡があっても、どのような理由で保護されたのか、どこの児相で保護されているのかといった情報は守秘義務で教えてもらうことができなかったという。このような場合は、教員が情報を知っているフリをして聞き出すなど、連携を取るといったこととはまったく反対のことをしていることになる。一方で、児相からも、学校と児相が協力するうえで行き違いが発生することがあるという話があった。本来であればSSWなどに対応させるべきなのに、学校は、本来児相の取り扱う内容でない事案で児相を呼ぶことがあるというのだ。このように、連携しようにも連携するための相互の理解がなかったり、体制が整っていないため、双方の時間と労力が取られている。また、やっと連携が取れたとなっても行き違いから意味のない空回りが起こってしまうこともある。

SSWという専門的な立場からも、似たような実態が語られていた。問題を解決するためにSSWが教員と連携しようとしても、相手が連携することを考えていないことがあるという。なぜなら、教員が専門的な人材について正しく認識しておらず、SSWに任せればどんなことでも解決してくれる、すぐに解決してくれるといった思い込みがあるためだという。これは、先ほどの事案を丸投げしてしまうという例にもつながるものであり、教員とSSWの間での、連携に対して意識の差を示しているだろう。そして、学校側にSSWを受け入れる用意が整えられていないという、体制的な問題もある。例えば、学校内にSSWの部屋や机が用意されていないといったことが、それを象徴している。

このように、「チームとしての学校」の連携の難しさは、それぞれの意識の差によるものもあ

れば、守秘義務や環境といった連携のためのそもそもの体制が整えられていないことによるものもある。本来ならば、学校や教員が専門的な人材と連携して問題を解決するという姿が求められているが、授業でそれらに関わる人々に話を聞いてきた限りでは「チームとしての学校」は、上手く機能しているとはいえず、名前が掲げられているだけのものとなってしまっていた。

なぜ、このような問題が起こるのか、その原因を考えてみたい。まず、教員と専門的な人材、児相の連携についてだが、これについては教員の理解不足があると考えられる。教員は専門的な人材と児相が何をどこまでできるのか、どのように協力すべきなのかということ知らなかったり、連携する必要があるということさえ知らなかったりする。そのため、問題を専門的な人材に任せっきりになったり、なんでもすぐに解決できるなどといった誤った理解をしてしまうのだと考えられる。

また、連携のための体制が整えられていないという問題もあるが、これは当事者ではどうしようもない部分もあるだろう。児相の守秘義務については、教員や児相職員がルールを破るわけにもいかない。これは「チームとしての学校」を超えた枠組みに関するものであり、ルールが実態に追いついていないということが原因である。これにはルールを変えるなどしなければならず、ルールを変える人がどうにかしなくてはならない。そうした問題を除けば、学校側にまだ新しい人材を受け入れられる体制が整っていないという場合と、単純に受け入れる体制を整えるための予算がないということが考えられる。現在、教育のための予算は十分とはいえず、学校がPTAの会費を頼りにしているという実態もあるという。PTAという立場から見ても、どこにでも予算の問題が付きまとうのが今の日本の教育の現状だという話があった。予算の問題も「チームとしての学校」になれない一つの問題だといえるだろう。

私は、この「チームとしての学校」が掲げられていることに疑問を感じる。なぜなら、教員が専門的な人材や児相の事をしっかり理解できていなかったりするなど連携できるだけの人材が育っていないうえ、その体制も整っていないからである。そのような状況で目標だけが掲げられてもうまくいくとは到底思えないのである。そもそも、問題を連携して解決していくにもかかわらず、普段から教員と専門的な人材が交流してお互いを知り合うなどという機会が非常に少ない。基本的に教員は、週に5回学校へ来るが、SCは週に1~2回ほどしか学校に来ないうえ、複数の学校を掛け持ちしていることがある。このような状態で教員とSCがお互いのことを理解し合う機会を得ることは難しいだろう。そして、SSWに至っては全国にも数が少なく、まず学校へ来ることがない。問題を解決するために呼ばれて初めて出会うこともあるだろう。このような信頼関係も何もない状態で、いざ問題を解決するというときに連携をしていくことができるのだろうか。現実には「チームとしての学校」の「チーム」という部分が成立していないのに、無理にチームという枠組みで何とかしようとしているという印象であり、私はこの「チームとしての学校」というものがこのまま成功するとは思えない。

私は、この「チームとしての学校」という考え方には賛成であるが、連携のための体制や予算の確保を先に行うべきであり、この「チームとしての学校」を掲げたのはやや早すぎたのではないかと感じた。

## 注)

- 1) 授業の内容は、前掲 (pp.42-46) の堤孝晃「教職実践演習の記録——『チームとしての学校』をテーマとして」を参照。